

[003]障害史研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4772321>

出版情報：障害史研究. 3, 2022-03-25. Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

活動報告

〔1〕 科研メンバー

○ 研究テーマ

「障害の歴史性に関する学際統合研究 ― 比較史的な日本観察 ―」
(JSPS 科研費成果事業・基盤研究 A・JP19H00540)

○ 研究代表者

高野 信治 (九州大学比較社会文化研究院・教授)

○ 研究分担者

有坂 道子 (京都橘大学文学部・教授)	福田 安典 (日本女子大学文学部・教授)
大島 明秀 (熊本県立大学文学部・准教授)	藤本 誠 (慶應義塾大学文学部・准教授)
小林 丈広 (同志社大学文学部・教授)	細井 浩志 (活水女子大学国際文化学部・教授)
小山 聡子 (二松学舎大学文学部・教授)	丸本 由美子 (金沢大学法学類・准教授)
鈴木 則子 (奈良女子大学生活環境科学系・教授)	山下 麻衣 (同志社大学商学部・准教授)
瀧澤 利行 (茨城大学教育学部・教授)	山田 巖子 (論文は山田巖子) (弘前大学人文社会科学部・教授)
中村 治 (大阪府立大学名誉教授)	山本 聡美 (早稲田大学文学学術院・教授)
東 昇 (京都府立大学文学部・准教授)	吉田 洋一 (久留米大学文学部・教授)
平田 勝政 (長崎ウエスレヤン大学現代社会学部・教授)	

○ 研究協力者

赤司 友徳 (九州大学大学文書館・准教授)	CHWILA (九州大学大学文書館テクニカルスタッフ)
末森 明夫 (国立研究開発法人産業技術総合研究所 バイオメディカル研究部門・主任研究員)	高久 彩 (九州大学大学院地球社会統合科学府・博士後期課程)
クウィーラ・ダーヴィト＝ドミニク (David Dominik)	[2022年3月現在]

〔2〕 活動記録

○本科研・障害史研究会

・第5回研究会

2021年3月14日、オンライン

(1) 報告

- 1 中村 治 地域と精神医療（研究会サマリーとして概要を本誌掲載）
- 2 山本 聡美 障害とアートの新しいかたち——NPO 法人 studio FLAT（神奈川県川崎市）の活動を通じて（研究会サマリーとして概要を本誌掲載）

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

・第6回研究会

2021年7月25日、オンライン

(1) 報告

- 1 山田 巖子「生命の弁別と「障害」の表象」（概要）民俗学で扱う「異常児」は、双子や鬼子、福子など、「障害児」概念よりも広い。「異常出産」の「伝承」を「障害児」の殺害や遺棄という事実とつなげて解釈する論に対して、本発表では、河童の子、ケツカイなどと呼ばれる異常出産の伝承、「生き胞衣」とと呼ばれる胞衣の伝承から、民間には出産の際に「ヒトではないもの」が娩出されるという「知識」があり、近代医学とは異なる生命観があり、そのカテゴリーに即した対応をしてきたことを述べた。また、このような異常分娩の語りには産婆が重要な役割を果たしたことを述べた。質疑では、事例の時代への質問や、近代の資料を近世の資料と同様に扱うことに対して疑義があり、資料の話者の年代は明治から大正生まれの女性が多く、近世の文書にある「知識」との関連がうかがえることなどを述べた。

また呪術的産と近代産婆との関りや葛藤、双子などの「異常児」への具体的な扱いについての質問があった。

- 2 東 昇「生瀬克己『近世障害者関係史料集成』の編纂とデータベース」（研究ノートとして本誌掲載）（概要）障害史研究者生瀬克己氏の『近世障害者史料関係集成』（1996年）について、①編纂過程、取

録史料の②年代、③地域、④刊行史料、⑤表現・言葉の特徴を分析し、今後の史料集やデータベースの方向性を提案した。①同書には621件収録されているが、前史として「近世障害者年表」を位置づけた。②件数の多い年代は幕府の法令と各藩への全国普及、各地の豊富な事例によるもの。③④全体の4割を超える法令集による地域の偏在があり、未掲載地域も4分1にのぼる。⑤8割は視覚障害、内4割は四官（座頭・検校など）であった。

質疑応答としては、同書の編纂傾向は編者の意図ではなく対象史料集の限界。今後の史料集・データベースにおける障害の定義の必要性。各時代における障害とは何か、史料に障害が記録される意味を検討。視覚障害は自力、政策に対応しているため記録が多い。データベース公開の方法論、等があった。

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

・第7回研究会

2021年10月31日、オンライン

(1) 報告

- 1 樋原 裕二「近世日本における「偽障害者」」（概要）前近代障害史研究について、本報告では新たな視角の提示として、「障害がないのに『障害がある』と偽る」ことへ注目した。先行研究ではこのテーマについて、聴覚障害者史研究のなかでわずかに言及されるにとどまっていた。本報告では先行研究で取り上げられた史料に加えて、新たな史料も含めて検討した。

その結果、聴覚障害者以外にも様々な「偽障害者」が確認されたのだが、「障害がある」と偽る（との疑いや偏見をもたれる）ことには、「物乞いをしやすくするため」「扶持米を受給するため」「取り調べを免れるため」「家の相続から外れるため」等の理由があり、いずれも身分制社会の枠組みから外れた位置に障害者が置かれたが故だった。

しかし障害者が町を歩くだけで石を投げつけら

れるほどの厳しい差別が存在したのに、「障害がある」と偽る者がそれほど多かったとは考えにくい。それにもかかわらずそのような者があたかも実在するかのように言われることに、近世社会が障害者とのコミュニケーションを根本的に欠いていたことが示されていよう。

質疑応答としては、『洛中洛外図屏風』の図像に関する解釈、中国の『佯狂』との関係、偽ることを誰が問題とするのかという点、報告者の考える障害史の近世的特質等。

2 高野 信治「近世日本の社会観と〈障害〉認識——石門心学をめぐる——」(論文として本誌掲載)

(概要) 前近代における不十分な医学水準のなか、身体観ないし心身観が、宗教性や道徳性と不可分な関係にあったこと、そのような見方が庶民レベ

ルで浸透、定着し、心身の損傷が社会文化的な観念のなかで捉えられるようになった可能性があることを、「石門心学」(近世日本において庶民階層にも受容されたとみられる社会思想の一つ)を対象に考え、近世日本の障害認識の一端に迫ることを課題とした。

質疑としては、石門心学にみる、天につながる人という考え方(天人思想)は、より古い時代から社会的な影響を持つ可能性があり、そのようななか石門心学の位置をどのように評価するのか、石門心学は京都の商人哲学を基本的性格に持つので地域性を考慮すべきではないのか、また、時代縦断的に、障害概念を追求することは大事な観点ではないか、という意見もあった。

(2) 打ち合わせ(運営の方針・計画)

○学会報告

- 2021年5月2日、仏教文学会5月例会、金城学院大学(オンライン)、小山聡子「中世前期の疫病治療と加持」(シンポジウム「文化・表象としての〈疫病〉——医術・信仰・説話から問う」) 概要: 中世前期の疫病治療として、古代においては禁忌とされていた、僧侶による加持が行われていたことを明らかにした。
- 2021年6月20日、日本時間学会第13回大会(オンライン)、細井浩志(キーノートレクチャー)「古代の疫病と「日本」の誕生」
- 2021年8月18日、TIMEJ Online Conference (Zuerich)、[HOSOI Hiroshi](#), [YUASA Yoshimi](#): Calendar in Medieval Japan,
- 2021年10月10日、日本民俗学会第73回年会(オンライン)、山田巖子「旧小川原湖民俗博物館の映像資料」 概要: 渋沢敬三の指導の下に1961年に青森県三沢市に開館した地方民間博物館、小川原湖民俗博物館の旧蔵資料のうち、映像資料を検討し、その特徴と民俗博物館としての先駆的な意義を述べる。
- 2021年11月6日、第24回精神医学史学会、日本医療大学月寒キャンパス(ハイブリッド)、中村治

「岩倉における精神病患者家族的看護の意味すること」 概要: 岩倉は精神病患者を家族的に看護したところとして有名である。しかしそのことが意味するのは、患者預かりを専門とする大雲寺門前の宿屋が、介抱人を雇い、患者を家族的に看護することなのか、一般家庭が患者を家族的に看護することなのか、明らかとはいえなかった。また、呉秀三は「岩倉に於て精神病患者を預り居る家は主として之が營業に従事するものみにして、其他の民家に於ては殆んど之の如きものあるを見ず、勿論特別の場合、例令ば貴顕紳士若しくは華族等にして精神病患者を發する時は、營業者に任せず、自家に縁故あるもの若しくは縁故あるものの親戚等に委嘱することあり」と述べているが、「貴顕紳士若しくは華族等」の「自家に縁故あるもの若しくは縁故あるものの親戚」とはどのような家のことなのか、明らかとはいえなかった。しかし最近、この問題の解明に役立つと思われる資料を岩倉で見つけた。それをもとにして、京都府や呉秀三やスチーダの文章などを整理すると、江戸時代には宿屋、明治時代から大正時代の初めには一般家庭に預けられていた患者が多いことがあったが、大正

時代末からは、宿屋が改称した保養所が看護人を雇い、患者を家族的に介護することがほとんどになったと思われる。発表では、その変化の原因について検討するとともに、その変化にもかかわらず変化しなかったものがあるとすれば何かについても検討した。

- 2021年11月6日・7日、公益社団法人日本学校保健学会第67回学術大会、愛知学院大学（ハイブリッド）、瀧澤利行：シンポジウム I 「学校保健研究の原点にせまる — 設立時の理念とその後の研究の展開から今後の方向性を探る —」コーディネーター及び演者「日本学校保健学会における研究の原点とは何か — 実践のための理論と理論を導く実践 —」
- 2021年11月14日、第26回 国際浮世絵学会 秋季大会（オンライン）、鈴木則子（シンポジウム報告）「安政六年コレラ流行と摺物」
- 2021年11月27日・28日、日本福祉教育・ボランティア学習学会第27回埼玉大会（オンライン）、瀧澤利行他：一般発表「全国における大学のボランティア活動支援に関する実態調査続報」
- 2021年12月11日、2021年度九州史学会大会（オンライン）、細井浩志（コメント）「シンポジウム《国際的視座からみた壱岐国一島史》」
- 2021年12月5日、経営史学会第57回全国大会（オンライン）、山下麻衣「第二次世界大戦後における付添婦の存続理由に関する研究」概要：この報告の目的は、付添婦を医療機関に紹介することで収入を得ていた看護婦家政婦紹介所および家政婦紹

介所の機能を分析することによって、職業としての付添の存続理由を明らかにすることであった。この報告のために作成した論文において、多くの付添婦の女性が、長期入院を余儀なくされる結核を患った患者たる戦傷病者を多く収容していた国立療養所で、1950年代に働いていた背景を示した。長期療養者、戦傷病者、結核患者という特徴を併せたもった個人が誰によってどのようにケアされてきたのか。障害の歴史研究において明らかにすべき論点である。

- 2021年12月20日、第4回考古天文学会議、吉野ヶ里歴史公園センター、細井浩志「古代の暦と月」
- 2021年12月11日、二松学舎大学人文学会第123回大会、二松学舎大学（ハイブリッド）、山本聡美「愛執の図像学 — 中世説話画に描かれた愛と発心」。概要：中世絵巻において、高僧や行者への恋慕を契機として信仰に目覚めてゆく女性たちの図像解釈を試みた。「粉河寺縁起絵巻」「華嚴宗祖師絵伝」「道成寺縁起」を中心に取り上げ、愛執を梃子に発心へと至ることを目指す、中世仏教的教導の実態について論じた。
- 2022年3月19日、仏教文学会2021年度12月例会（日程を変更して実施）、早稲田大学（ハイブリッド）、山本聡美「横川靈山院の六道絵 — 『往生要集』からの飛躍」。概要：表題作の制作意図について、13世紀における『往生要集』受容と解釈という観点から分析し、特に阿修羅の表現が帝釈天と闘う図像に焦点化する淵源を、同時代の軍記物語や合戦図との関りから論じた。

○研究会報告

- 2021年6月27日、東北アジア研究センター25周年記念国際シンポジウムセッション B 1 「近世日本における知識人と社会思想」での報告、東北大学・東北アジア研究センター（オンライン）、高野信治「近世日本における〈障害〉認識の形成と社会観」概要：近世の社会思想として石門心学を対象に考える契機となった報告で、そのテキストに〈障害〉表現が多く見える意味を問おうとした。
- 2022年1月17日、東国真宗研究所第三回研究会（オンライン）、小山聡子「語られた親鸞の結婚」

概要：近世の親鸞伝で語られた親鸞の結婚と近世における妻帯の問題について論じた。

- 2022年1月29日、同朋大学仏教文化研究所「日本仏教の成立と展開」研究会・神仏交渉史研究会・神仏融合研究会・宗教史研究会主催、「書評会・吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』」（オンライン）、藤本誠「吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』の特徴 — 全体と個別の論点をめぐって —」、内容：吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』所収の古代・中世前期を中心とする6論文の書評。

○講演

- 2021年6月6日、「上杉博物館特別展・上杉鷹山の生涯：藩政改革と家臣団」講演、米沢市上杉博物館（オンライン）、高野信治「大名家臣団の『奉公』とは何か」
- 2021年8月5日、第21回関西精神文化研究会、ホテルヴィアーレ大阪会議場、(ハイブリッド)、山本聡美「日本美術の闇と光——仏教の造形に見る病と死、そして救済」概要：中世絵画に描かれた疾病・障害を取り上げ、その背景にある救済の思想について講じた。
- 2021年8月27日、徳川みらい学会、鈴木則子（講演）「幕末のコレラ禍と人々の暮らし～駿河国富士郡大宮町の史料から」
- 2021年8月28日、日本史研究会主催「第9回 歴史から現在を考える集い」、平安女学院大学京都キャンパス、高野信治「障害認識を遡る」(対面開催中止) 概要：現代社会で様々な局面にて注目される障害の認識を、前近代まで遡って問う意味を考えようとした（一般参加を重視し対面開催、しかし2度目も中止。以後予定無し）。
- 2021年9月4日、夏の企画展「あはひのクニあやかしのクニ～ふくしま・東北の妖怪・幽霊・怪異」、福島県立博物館、小山聡子「もののけ・幽霊・妖怪の日本史」概要：東北の妖怪や幽霊にも触れつつ、日本人がこれまでモノノケや幽霊、妖怪をどのように捉えてきたかを論じた。
- 2021年9月7日、SHIBUYA QWS クエストンカンファレンス（オンライン）、鈴木則子、田澤雄基対談「医師とは何と向き合う仕事なのか？」
- 2021年9月18日、第122回日本医史学会総会・学術大会、オンライン公開講座「ウィズコロナを生きる——歴史と科学そして音楽」、鈴木則子（講演）「江戸の流行り病と人々の暮らし——幕末の疱瘡と種痘導入をめぐる——」
- 2021年10月19日、新建新聞社 リスク対策.com オンラインセミナー、鈴木則子（講演）「病の歴史から考えるコロナ対策と危機管理～近代以前の社会ではどのような病気が流行ったのか」
- 2021年10月19日、京都府立高等学校人権教育研究会、中村治「洛北岩倉と精神医療」概要：京都府立高等学校、人権教育研究会のメンバーを案内して岩倉を歩き、解説した。
- 2021年10月25日、弘前高校、山田巖子「マイノリティと関わる『民俗語彙』」
- 2021年11月5日、2021年度差別の歴史を考える連続講座（京都部落問題研究資料センター）小林丈広「感染症と差別——1890年代の巡回記録を読む——」
- 2021年11月18日、活水女子大学オンライン講演会、中村治「地域と精神医療」
- 2021年11月20日、第19回歴史回廊を極める・北垣国道日記『塵海』を追う——その1 明治期の上京編—— 京都歴史回廊協議会、小林丈広「1886年コレラの流行と北垣国道」
- 2021年11月21日、東京都国立市公民館市民講座、国立市公民館、山本聡美「疫病と日本美術」概要：古代・中世日本における疫病流行と仏教美術との関係を講じた。
- 2021年11月24日、国文学研究資料館「ないじえるワークショップ」、国文学研究資料館、山本聡美「境界線上の図像——九相図が示す死と生／男と女／性と聖」概要：同資料館アーティスト・イン・レジデンス招聘作家を対象とした講演。中世絵画における、死、病、障害などの表象が、社会におけるいかなる境界線をあぶりだすものであるのか、あるいはその境界線を無効化する機能を有するののかについて講じ、ディスカッションを行った。
- 2021年11月28日、左京区役所（左京区まち歩き）、中村治「洛北岩倉と精神医療」概要：左京区民を案内して岩倉を歩き、解説した。
- 2021年12月19日、愛媛大学文系研究センター「合同シンポジウム～三輪田米山生誕二百年記念 米山日記とその時代～」、愛媛大学社会連携推進機構文系研究センター主催、愛媛大学、福田安典「米山日記の世界」
- 2021年12月21日、日本女子大学文学部学術交流・日本女子大学文学研究科学術交流「シンポジウム「講談『玉藻の前』と江戸文芸」福田安典主催（オ

- ンライン)
- 2022年3月16日、日本女子大学文学部学術交流企画・日本女子大学文学研究科学術交流企画・フィリピン大学 (UP) デイリマン校、国文学研究資料館、日本女子大学連携シンポジウム「フィリピンにおける日本古典研究とパフォーマンス」福田安典主催 (オンライン)
 - 2022年3月20日、岩木山を考える会主催、第6回

岩木山講座、山田巖子「北東北の鬼信仰——岩木山信仰の背景と担い手」

- 2022年3月23日、第781回仏教文化講座 (浅草寺主催)、丸の内マイプラザ、小山聡子「鬼の日本史」、概要：日本における鬼について、鬼子 (障害児) の観念の変遷にも触れながら、その歴史的変遷を論じた。

○講座

- 2021年6月19日、「時間学公開学術シンポジウム2021——働き方・子育て・時間——」主催：山口大学時間学研究所、共催：活水女子大学、日本時間学会、後援：山口市教育委員会、長崎市教育委員会、細井浩志 シンポジウムのコーディネーター (オンライン)
- 2021年7月4日、久留米大学&小郡市包括連携協定事業 (小郡市埋蔵文化財センター)、吉田洋一「久留米藩の学問と教育——明善堂を中心に——」概要：久留米藩の学問 (儒学・医学・算学) について概観し、九州医学専門学校設置 (1928年) に至る経緯も付言した。
- 2021年9月30日、令和3年度県民ふるさと講座、アクロス福岡、吉田洋一「真木和泉守——尊王攘夷の立役者」概要：久留米水天宮の神官真木和泉守 (保臣、1813~64) の生涯と、彼が関わった久留米藩内の政争や、幕末の藩医学校設立の背景などを解説した。
- 2021年10月1日、2021年度慶應義塾大学文学部公

開講座、慶應義塾大学 (録画公開)、藤本誠「仏教説話からみえる古代社会~古代地域社会の寺院と酒をめぐって~」

- 2021年10月21日、令和3年度県民ふるさと講座、アクロス福岡、吉田洋一「亀井南冥——筑前亀井学の祖」概要：福岡藩儒医学者亀井南冥 (1743~1814) の生涯と、その学統・門人 (亀井昭陽、廣瀬淡窓、頭山満、福澤諭吉など) に関して解説した。
- 2021年11月28日、オンライン講座「つながる古典／現代 ジェンダー・病・戦争・障害・差別」、鈴木則子・日置貴之・木ノ下祐一講演・対談「古典芸能と感染症」
- 2021年12月8日、NHK文化センター (オンライン)、小山聡子「人は何を恐れてきたのか——モノノケ・幽霊・鬼の日本史 [第1回]」
- 2021年12月22日、NHK文化センター (オンライン)、小山聡子「人は何を恐れてきたのか——モノノケ・幽霊・鬼の日本史 [第2回]」

○調査

- 2022年3月、宮古島においてかつての精神病者・ハンセン病者の処遇を調査予定、中村治

[3] 研究短報

○有坂 道子

今年度、引き続き日記や記録類を対象に、病と障害、あるいは弱者に対する救恤など、テーマに関連する事例を探す作業を進めた。また、木村兼葭堂の

蔵版で出版された書籍類について、広く啓蒙の視点から再検討をしている。

あわせて「障害」関係論文のリスト化を進めている。

○大島 明秀

- ・大島明秀編『熊本博物館蔵村田三節医書コレクション目録』同発行
熊本市の産婦人科医であった村田三節が蒐集した古医書145冊について、書名、冊数、法量、著者名、成立年、刊記、奥書、識語、印記などを採録した目録（A4判／xxxii, 8頁）を2021年8月に発行。障害史に係る近世の医学・医療状況を探るた

め、前年度から行っていた熊本博物館に収蔵される村田三節旧蔵古医書の調査を完了し、目録化した。

- ・近世肥後北部の障害史に係る医学・医療状況を窺うため、複数回にわたって熊本博物館に収蔵される（近世・玉名の人物の旧蔵に係る）前原健太郎旧蔵古医書の調査を行った。この成果は来年度に発表する予定である。

○小林 丈広

- ・論文
「近代都市と「衛生自治」——「貧民部落」をめぐって——」『都市史研究』第8号（都市史学会）、2021年10月25日、65～75頁
- ・研究ノートなど
「日本における近代的防疫行政の形成」『都市計画』

第351号（70巻4号、日本都市計画学会）、2021年7月15日、30～31頁

「コロナ禍の日々——二〇二〇年八月頃までを振り返って——」『地方史研究』第412号（第71巻第4号）、2021年8月1日、48～53頁（特集コロナ禍の地方史研究、地方史研究者の日常と挑戦）

○小山 聡子

- ・鬼子（障害児）や鬼の歴史的観念に関する書籍や論文を収集した。
- ・細井浩志氏と藤本誠氏とともに、病因論に関わる文献リストの作成のために、幅広く文献収集の作業を行ない、リストを作成した。リスト作成のため、複数回にわたりZoomを用いて、障害の歴史学研究に関する情報共有を行った。
- ・対談「妖怪が面白い！対談 小山聡子×松金直美」『同朋』第73巻第4号、東本願寺出版、2021年4月、5～13頁
- ・論文「中世前期の瘡病治療——病原は鬼か狐か」『現代思想』2021年5月臨時増刊号「陰陽道・修験

道を考える」第49巻第5号、青土社、2021年5月、399～410頁

- ・連載「往生際の日本史——浄土真宗編 その三 疫病による死」『ひとりふたり・・・』第159号、法藏館、2021年6月、5～7頁

- ・論文「中世における神の調伏・疫神の調伏」『日本史学集録』筑波大学日本史談話会、2021年7月、60～64頁

- ・解説「結界が封じ込めたモノ——『常陸国風土記』から『妖怪大戦争ガーディアンズ』へ」『武蔵野樹林』第7号、角川文化振興財団、2021年7月、36～37頁

- 連載「往生際の日本史——浄土真宗編 その四 理想的な往生際とは」『ひとりふたり…』第160号、法蔵館、2021年9月、5～7頁
- 二松學舎大学人文学会第121回大会シンポジウム記録「災異と疫病と呪術」、研究報告「もののけと呪

術」、座談会、質疑応答」『二松學舎大学人文論叢』第107号、二松學舎大学人文学会、2021年10月、1～33頁

- 論文「日本中世の幽霊と死体」『早稲田文学』第1036号、早稲田文学会、2021年10月、183～191頁

○末森 明夫

【査読学術誌】

- 末森明夫 (2021) 「手話歌と『開かれた作品』」『手話学研究』30 (2) : 1.
- 末森明夫 (2021) 「蝸の手話と聾歌」『手話学研究』30 (3) : 1-2.
- 末森明夫・斉藤くるみ (2021) 「日本手話語彙にみる線条性：表語音節語につなげられた指文字にみる音声補字的用法に関する一考察」『日本社会事業大学研究紀要』68 (印刷中).

【予稿】

- 末森明夫 (2021) 「日本手話にみる送り指文字と迎え指文字：超拡張記号図式と圏論による送迎指文字の考察」『第47回日本手話学会大会予稿集』12-13.

【記事（査読無）】

- 末森明夫 (2021) 「故事「吞炭為瘖」にみる「瘖」：「瘖」「失音」「嘶啞」の連関性」『聾啞史会報』66 : 20-21.
- 末森明夫 (2021) 「『世渡風俗図会』にみる聾図像」『聾啞史会報』69 : 12-14.

○鈴木 則子

- 彙報「江戸の流行り病と人々のくらし——幕末の疱瘡と種痘導入をめぐる——」
日本医史学雑誌67 (2) 143-146、2021年6月20日
- 論文「安政五年コレラ流行をめぐる〈疫病経験〉——駿州大宮町柵屋弥兵衛の日記から——」(『歴

史学研究』(1011) 12-25 2021年7月) を発表した。今年度は出張調査はできなかったが、感染症関連の史料と併せて障害者関係史料も収集した。医療従事者としての視覚障害者について考察を進めたい。

○高久 彩

- 論文「明治4年太政官布告の「古器旧物」分類の特質——博覧会と神祇行政の関係性に注目して——」(『文化政策研究』第15号、2022年4月刊行予定、査読あり)、概要：明治政府が目指した祭政一致と「博物館」(東京国立博物館の前身)の制度化との相互関係を理解するため、国内外の「もの」の分類の比較を通じて、明治初期の「古器旧物」の収集や展示における神祇行政の教化とそれを支えた思想を析出し、明治4年太政官布告の特質を明らかにすることを試みた。
- 学会報告「明治15年に開館した「博物館」に関する一考察——列品の分類体系と「史伝部」という分類項目に注目して——」明治維新史学会第51回

大会 (Zoom 会議)、2021年11月、概要：明治15年3月に開館した「博物館」(東京国立博物館の前身)制度の特質を解明するため、列品(収蔵品)の分類体系と「史伝部」(列品の分類項目の一つ)の形成に着目し、そこでの歴史観を考察した。

- 2022年度は、博士論文の修正作業を進めつつ、本研究課題「日本の見世物における障害者」に関して、19世紀中頃における民間信仰や迷信に基づいた価値観などの観点から障害者と見世物との関係を考察し、見世物という「博物館」の周辺における諸問題や「博物館」における科学性と見世物的要素を検討したい。

○高野 信治

- 〔小論〕「奉公への思いと人事の難しさ」開館二十周年記念特別展『上杉鷹山の世界 ― 藩政改革と家臣団―』米沢市上杉博物館、pp.97-100、2021年4月
- 〔論文〕「石門心学道話にみる〈障害〉の比喩化：狂言台本の題材化との比較」『九州文化史研究所紀要』65号、pp.1-35、2022年3月。「近世日本の社会観と〈障害〉認識：石門心学をめぐる」(本誌掲載)と関わるが、石門心学のテキスト類には多くの障害者をめぐる比喩が載る。これを室町期の狂言での障害者の題材化が主に笑いを主題にするのに対し、石門心学では人の資質を教諭する比喩、という性格があることを、提示する。
- 〔書評〕「書評・平野克弥著、本橋哲也訳『江戸遊民の擾乱』岩波書店」『図書新聞』3531号、2022年2月19日。本書は、法学・政治学を専攻する著者の学位論文だが、私に関心を持つマイノリティにもつながる「遊民」の存在を組み入れた歴史像の構築を企図し、啓発は大であった。
- 〔書評〕「書評 野村禎司著『近世旗本領主支配と家臣団』吉川弘文館」『歴史学研究』1020号、pp.43-46、2022年3月。領主と幕府官僚という二つの側面を持つ旗本を対象にした「近世的領主」論だが、これは、武家領主の治政、民政に関連する問題でもある。
- 〔論文〕「夫婦の日記：広島藩儒者頼春水と妻梅颯が綴る生活記録」福田千鶴・藤實久美子編『近世日記の世界』ミネルヴァ書房、pp.284-292、2022年3月。江戸時代、夫婦揃って日記を記す事例は少ないと思われその現存は稀有だろう。標題にある夫婦を生活とジェンダーの観点から史料論的に検証した。
- 〔単著〕『神になった武士 ― 平将門から西郷隆盛まで―』吉川弘文館、358頁、2022年3月発売(4月刊行)。武士の神格化をめくり、生き続ける武士の記憶、というモチーフで、拙著『武士神格化の研究 資料篇』(吉川弘文館)の武士祭神の統計化をもとに、啓蒙的な文脈で論じた。障害史にも関連する武士の治癒神的性格にも言及する。

○瀧澤 利行

- (1) 公益財団法人日本学校保健会100周年事業実行委員会記念誌部会編『日本学校保健会百年史』(瀧澤利行編集委員長：「第1編 学校保健の胎動」「第2編5 大正前期衛生政策における学校衛生」「第3編-1・5 大正後期衛生政策における学校衛生」「第3編-2・2 帝国学校衛生会設立の経緯」
その他項目多数：公益財団法人日本学校保健会、2021年3月31日
- (2) 洋学史学会監修：洋学史事典：瀧澤利行「養生・公衆衛生」の項執筆：思文閣出版、2021年10月21日

○中村 治

- (論文、査読有)
- 「呉秀三と岩倉にいた貴顕」、『精神医学史研究』vol.25, no.1-2合併号、2021年11月5日、pp.7-15。
- (新聞記事)
- 2021年11月7日 「京都民報」
「里子預かり1」
 - 2021年11月14日 「京都民報」
「里子預かり2」
 - 2021年11月15日 「左京ボイス」(京都市民新聞左京区版)
「岩倉というところ」
 - 2021年11月21日 「京都民報」
「岩倉と精神病のかかわり」

- 2021年11月28日 「京都民報」
「精神障害者の参籠の増加と介抱人」
- 2021年12月5日 「京都民報」
「京都癲狂院と岩倉」
- 2021年12月12日 「京都民報」
「岩倉病院と保養所」

- 2021年12月19日 「京都民報」
「南方熊楠と岩倉」
- 2021年12月26日 「京都民報」
「地域と精神科病院」

○東 昇

- 今年度は、生瀬克己氏の『近世障害者関係史料集成』(1996年)を中心に、①生瀬氏の研究方法、編集過程を概観、②収録史料の年代、地域、収録史料、表現・言葉の特徴を分析、③今後の史料収集、公開方法を検討し、『障害史研究』3号へ投稿した。
- 史料分析 ①『近世障害者関係史料集成』の掲載史料の偏在から、未掲載の尾張の史料である、尾張藩士朝日文左衛門の日記『鸚鵡籠中記』の関連史料の目録を作成した。②同じ武家の日記史料で

ある、紀州藩の藩校督学の妻川合小梅の『小梅日記』の関連史料の調査を進めている。③孝子褒賞関係では、小浜藩の『若州良民伝』、岡山藩の『備前国孝子伝』、福岡県史資料所収の『孝義録』『筑前国孝子良民伝』『筑紫遺愛集』『筑紫民間孝子傳』『筑紫孝子傳』『筑紫良民傳』『孝義旌表録』『孝義二十八人傳』『秋月領分在町孝行奇特者名前』から、本研究に関連する資料の目録を作成した。

○平田 勝政

- 「1930年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究——「らい予防デー」の成立・展開過程の検討を中心に——」『鎮西学院大学現代社会学部紀要』第20巻第1号、pp.73~88、2021年12月：ハンセン病患者の人権を左右する隔離監禁主義と治療解放主義の相克過程の解明作業を1930年代の「台湾」に注目して検討。
- 研究活動としての資料調査(出張)はコロナ禍(第5波・第6波)ですべて移動自粛(中止)を余儀なくされ、下記の文献資料集成を購入して「優生保護法と障害者の人権」に関する研究の手がかり

を掴み、今後の新資料発掘の課題を明確化した。

- ① 『編集復刻版 優生保護法関係資料集成 第2期 市民運動編』第2回配本(第4~6巻、六花出版、2021年5月発行)
- ② 『編集復刻版 精神障害者問題資料集成 戦後編』第II箱(第7~12巻)、六花出版、2018~2019年発行)

また全国(各都道府県)の障害者基本計画の資料収集の作業を九州各県と長崎県下に限定して行い、障害者権利条約の影響の検討に入った。

○福田 安典

【著書】

- 『伊予俳人 栗田栲堂全集』(和泉書院、2020年、共著、2020年度文部科学大臣賞)
- 『医学・科学・博物 東アジア古典籍の世界』(勉誠出版、2020年、共著)
- 『説話文学の最前線』(説話文学会、文学通信、

2020年)

【論文】(前号報告以降)

- 「伊達家の歌会(吉村・村倫・重村の和歌)——日本文学科所蔵資料から——」(『国文目録』第六〇号、2021年3月、pp81-88、査読無し)
- 「高校に古典は本当に必要か——高校生との対話を

- 通じて——」（『日本文学』70-3、2021年3月、査読有り、pp25-34）
- ・「写本『悪狐三国伝』と桃栗庵について」（『読本研究新集』第12集、2021年3月、pp17-32、査読有り）

- ・「門・風の倫理」（『日本文学研究ジャーナル』第18号、2021年6月、pp52-62、査読無し）
- ・「井上蝶庵『連歌提要』と上田秋成」（『上方文藝研究』第17号、2020年7月、pp53-62、査読あり）

○藤本 誠

- ・細井浩志氏・小山聡子氏とともに、昨年度から継続の古代中世文化宗教史グループの打ち合わせを、2021年3月29日、5月1日に行い、それまでの作業を確認・修正の上、「古代・中世疾病観論文リスト」を完成・提出した。
- ・論文
 - (1)「祭祀・祓と馬」（佐々木虔一・川尻秋生・黒済和彦編『馬と古代社会』八木書店、2021年5月、421～438頁）
 - ・その他の業績
 - (1)「日本古代の「在路飢病者」と古代仏教の「救済」」（『歴史評論』854号、2021年6月、85～87頁）
 - (2)「古代の荏原郡の交通と宗教施設からみた三田二丁目町屋跡遺跡」（トキオ文化財株式会社編『三田

二丁目町屋跡遺跡——慶應義塾大学三田キャンパス東別館建て替え工事に伴う埋蔵文化財調査報告書——』慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室発行、2021年7月）

- (3)「仏教説話からみえる古代社会～古代地域社会の寺院と酒をめぐる」（2021年度極東証券株式会社寄附講座 慶應義塾大学文学部公開講座『めぐりあう文学部』慶應義塾大学文学部、2022年3月、46～55頁）
- ・2022年度は、2020年度より進めてきた古代仏教説話データベースの成果を踏まえ、『日本霊異記』や『東大寺諷誦文稿』の障害表現に影響を与えたと考えられる、中国仏教説話の構造と表現の分析を進めていきたい。

○細井 浩志

- ・学術論文
 - (1) 単著
 - 1) 古代における晴明像の形成、林淳編『新陰陽道叢書第5巻特論』、37-70頁（名著出版、大阪府）、2021年
 - (2) 共著
 - 1) 細井浩志・中村琢：『暦林問答集』の新写本について——古谷義昭氏所蔵『暦林問答集』の紹介と検討——、東方宗教136、1-21頁（日本道教学会、つくば市）、2021年【査読あり】
 - ・学術論文に準ずるもの
 - 1) 「新しい安倍晴明像」の始まり、現代思想49-5（総特集「陰陽道・修験道を考える」）、38-49頁（青土社、東京都）、2021年
 - 2) 赤澤春彦・梅田千尋・斎藤英喜・細井浩志、討議1「陰陽道研究の現在とこれから」、現代思想49-5（総特集「陰陽道・修験道を考える」）、74-95

頁（青土社、東京都）、2021年

- 3) 六国史編纂と木簡——特に『日本書紀』との関係で——、月刊考古学ジャーナル10、No.759（特集7世紀木簡）、37-40頁（ニューサイエンス社、東京都）、2021年
- 4) 古代日本への天の思想の伝来、東アジア恠異学会編、恠異学講義 王権・信仰・いとなみ、188-200頁（勉誠出版、東京都）、2021年
- ・研究に関わる社会活動
 - 1) 田中史生・細井浩志：2020東京オリンピック聖火リレーにおける「遣唐使船」展示パネルの作成、展示期間4月29日～5月7日、角川文化振興財団（場所：長崎県庁1Fフロア）
 - 2) 細井浩志、赤澤春彦：陰陽道研究の現在、中外日報28674号（2021年4月28日）、7頁（(株)中外日報社、京都・東京）
 - 3) 細井浩志、山下克明、荒俣宏コメント（文・西

田健作、グラフィック・北谷凜)：朝日新聞2021年7月18日号「(扉) 安倍晴明、実は遅咲き陰陽

師 39歳まで「学生」／子孫が権勢広げるため神格化」

○丸本 由美子

(著作)

- ・「書評 高塩博『江戸幕府の「敲」と人足寄場——社会復帰をめざす刑事政策』(汲古書院、2019)『法制史研究』70(2020)280~286頁。

※なお、現在編集作業中の『法制史研究』次巻には、加賀藩研究ネットワーク編『加賀藩政治史研究と史料』(岩田書院、2020)の書評が掲載される。

(雑感)

前期の半年間に何かと気を遣うことの多い新入生科目の担当が増え、本務校の複数の全学規模の委員会に関わることが決まり、一方、体調には低空飛行の傾向があり、勿論、疫病関連では各種事態に即応してゼミや講義はもとより私生活についても行動の態様を変えねばならず——と、心身に負担がかかる

こと(と、その結果の体調の悪化)が予想されたので、余力を確保するべく、仕事を絞る意図は持っていた。具体的には、「自分の裁量で断れることは断る、または他の人に割り振るか延期する、自分にはできないことはきちんと果たす」という方針を立ててはいた。

立ててはいたものの、改めて研究業績に絞って一年を振り返ると、大変な寡作となってしまった。我が身の非力が恥ずかしくも情けない。

幸い、学内業務については、今年度内に行った整理が反映され、来年度は負担が減る——見込みとなっている。そこに割いていた時間と体力を研究に振り向けなおし、なんとか遅れを取り返したい。

○山下 麻衣

論文

- ①山下麻衣「看護の歴史とジェンダー」ジェンダー史学(17)65-69 2021年10月

概要：看護を担う者は、女性の集中という職業上の特徴にいかなる影響を受け、表現され、働いてきたのかについて、記述した。本科研との内容の関連においては、有資格者および無資格者を含む

看護職の階層構造の内容と理解のされ方について指摘した。

- ②社会経済史学事典(山下麻衣「看護と保健」)320-321 社会経済史学会 丸善出版 2021年6月

概要：近現代における保健師、助産師、看護師の歴史の概要を説明した文章である。

○山田 巖子

- ・山田巖子「幽霊画とは何か?——津軽の民俗学から——」『時空旅人』63号、2022年7月、pp.88-91

- ・「生命の弁別再考」と題する論攷を準備するも脱稿に至らず。

○山本 聡美

・論文

「鳥獣戯画」乙巻の主題と世界観——動物たちの悪心と報恩(『ユリイカ』53-4〈通号772〉、2021年4月)

「善知識としての病——古代日本における仏教美術と疫病」(『宗教研究』95巻2輯〈通号401〉、2021年9月)

○吉田 洋一

- 「福岡県下の洋学」(洋学史学会監修『洋学史研究事典』2021年9月、所収)執筆担当、福岡藩、小倉藩、久留米藩、柳川藩の蘭学洋学に関して概観した。
- 「久留米と医学——来目医師会・九州医専」、「久留

米藩の学問と文教——藩校明善堂・樺島石梁・矢野一貞」、「天保学連——水天宮真木和泉と尊攘運動」(『ふるさと文化誌(第10号)久留米まち物語(仮)』所収、2022年3月刊行予定)執筆担当